

こんにちは。別宮川三郎です。かつて吉野川は洪水のたびにその流路を変え、幾筋にも分かれながら徳島平野を勝手気ままに奔流してしまっていました。今月号は、川の水が流れる道筋（河道）の移り変わりの様子や阿波藍の盛衰などについて探訪しましょう。

1. 点在する「川の履歴」、徳島平野一面を蛇のように這う川筋

現在の吉野川の水の流れは堤防に挟まれたところを流れていますが、堤防がなかった時代はどうだったのでしょうか。堤防を歩きながら悠々たる流れをみると、吉野川がしばしば流路を変え、北の阿讃山地と南の四国山地に挟まれた徳島平野一体を自由奔放に流れていたとは、にわかには信じがたいことでしょう。

阿波市阿波町の県道鳴門池田線沿いに、赤子池、裏池、菖蒲池など小さな池がありますが、これらは「河跡湖」（写真1）といい、昔、吉野川が流れていた名残です。

また、吉野川市山川町の忌部山東麓の岩戸神社境内には大きな岩が点在し、そのうちの一番大きな岩の表面には渦状の穴が空いています。（写真2）

これは、「甌穴」と呼ばれるもので、急流によって運ばれてきた砂れきが河床の岩を削ってできたものです。このような、かつては川であった履歴が各所に残されています。



写真1 県道鳴門池田線沿いの河跡湖（案内図③）
（阿波市阿波町）



写真2 岩戸神社境内の甌穴（案内図④）
（吉野川市山川町）



図1 阿波淡路両国絵図（正保3年（1646））

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館「蜂須賀家文書」より
（ここでは徳島県立文書館所蔵の複製品に新旧河川名などを追記したものを転載しています）

次に、吉野川の昔の姿を古地図で見てください。

前頁の図1は、吉野川の全体の姿を見ることができ代表的な絵図「阿波淡路両国絵図」で正保3年(1646)に作成されたと言われています。

当時の河道は、いくつもの川が、複雑な編み目のように入り組みながら、くねくねと蛇行して河口部へ注ぎ、多くの地域が川中島になっています。現在の徳島阿波おどり空港周辺は、海であったことが伺えます。



写真3 藍畑（板野郡上板町）

○阿波藍の盛衰

このころの吉野川の沿川には、現在のような堤防はなく、頻発する洪水に悩まされてきましたが、一方で、洪水により運ばれてきた肥沃な土壌は藍作に適していました。また、藍は洪水が発生する前に収穫できるため、この地に適した作物でした。

藍作の始まりは不詳とされていますが、室町時代の「兵庫北関入船納帳」によれば15世紀には兵庫の港に阿波から大量の藍が積み出されていたことが知られています。

17世紀末の元禄期には国産木綿の栽培が普及し、市場に綿製品が出荷されるようになったことや藩の勸業政策のもと、日本で最大の藍作地帯が形成され、ますます藍の需要は高まり、寛政12年(1800)の作付面積は約6,500haに達しました。

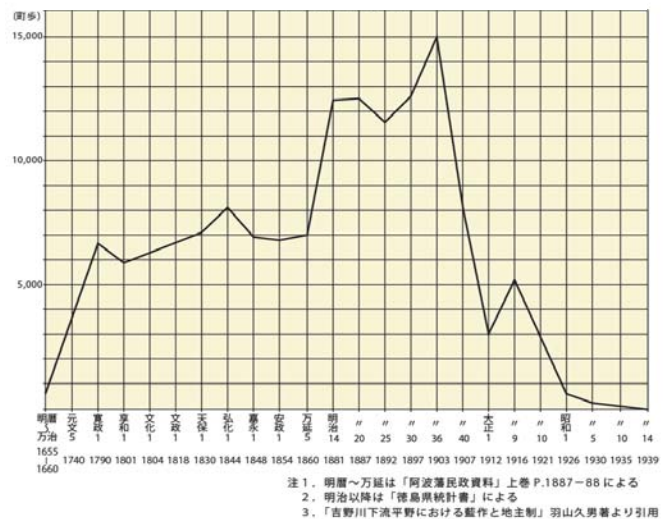
明治維新後も産業革命による紡績業の発達による染料の大量需要もあり、品質の良い阿波藍の栽培は発展を続け、明治22年(1889)の徳島市人口は全国10番目になるなど、徳島の経済を支えてきました。

さらに、栽培面積は、明治36年(1903)に約15,000haにおよび史上最大を記録しましたが、インド藍の流入、ドイツから安価な化学染料が大量に輸入されるようになると、たちまち阿波藍の市場を奪いとり衰退していきました。



写真4 藍染ハンカチ

図2 葉藍作付面積変遷図



徳島県立文書館 第15回企画展
吉野川中下流域の豪農 ―藍師 天野家文書より―

その後、藍作から稲作への転換のため、堤防や用水路の整備が強く求められることとなりますが、その話は別の機会にしたいと思います。

2. 悠々と流れる吉野川。しかし、それは、かつての別宮川だった。

吉野川の河口から約14km上流に第十堰があります。吉野川は、そこから河口に向かって川幅を広げながら悠々と流れ、雄大な景観や河口干潟の自然環境は、多くの県民に愛されています。しかし、その姿は、元々の吉野川の姿ではなく、明治の終わりから昭和の初めにかけて、人工的に整備された放水路なのです。藩政時代は、別宮川と呼ばれており、南北に蛇行しながら河口に注いでいました。

別宮川には、洪水を防ぐような大きな堤防はなく、毎年のように発生する洪水は、当時の吉野川（現在の旧吉野川）では処理しきれず、別宮川へ溢れ、川沿いの土地や集落に深刻な浸水被害を及ぼしていました。このため、別宮川を吉野川の放水路として洪水を安全に流すため、別宮川沿いに大堤防を築くとともに、川の土砂を掘削、浚渫したのです。

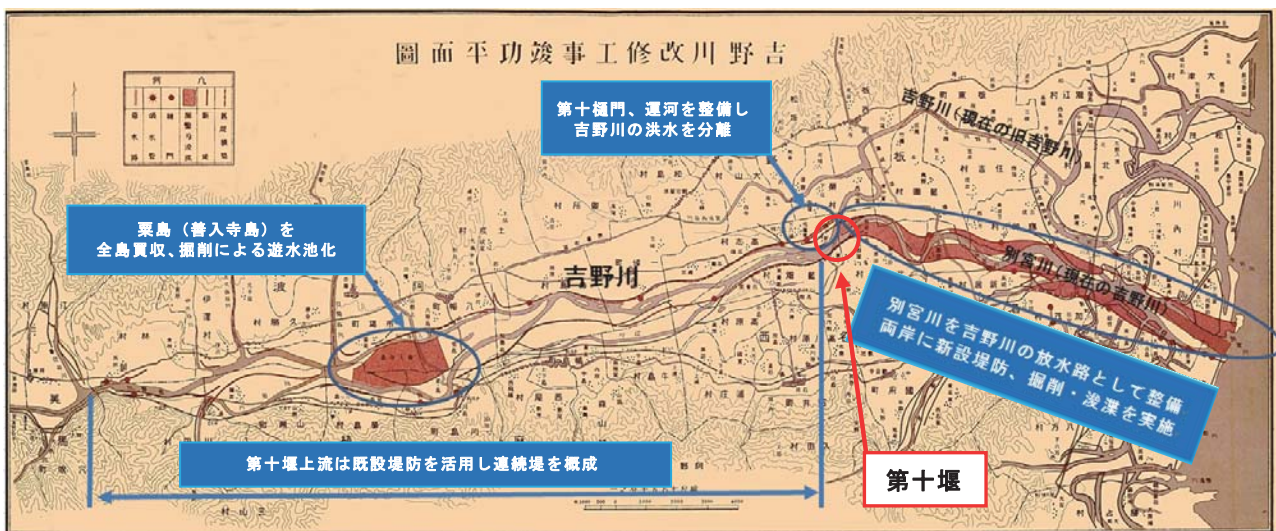


図3 吉野川改修工事竣工平面図（昭和3年）

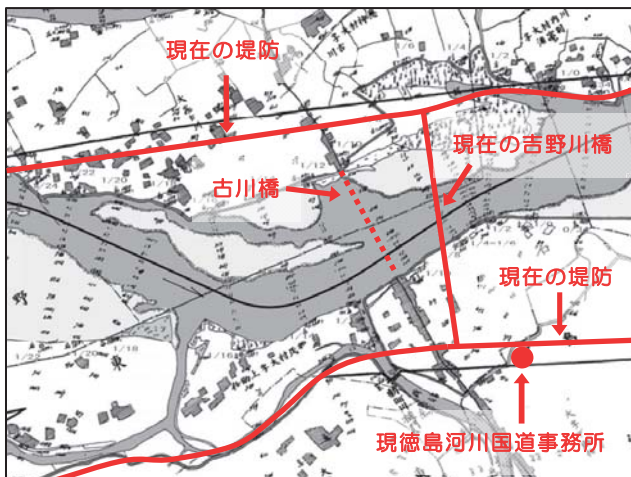


図4 明治34年 実測平面図



写真5 古川橋（大正7年ころ）

上助任地域の用地は、改修のため河川敷となり買収立退きの止むなきに至ったものが少なかった。その面積は120町歩に及び戸数は上助任で約100戸であった。

大正7年ころ、別名「賃取橋」、現在の吉野川橋の前身で明治19年から豊川仲太郎が経営していた。大正14年徳島県に5万円で買収された。

この別宮川の放水路工事、第十堰上流の堤防工事、善入寺島の全島買収など明治から昭和のはじめにかけて行った吉野川下流の一連の工事を「第一期改修工事」と呼んでいます。この工事のために行った土地買収の面積は、徳島市、次いで善入寺島の買収が多く約1,130ha（北島町の面積の約1.3倍）、家屋移転の面積は約62,300坪に上りました。

第一期改修工事の完成を報じる「徳島毎日新聞」（大正15年5月8日）は、「日本一の洪水大国、今は太平楽を謳歌する吉野川の大平野」、「3,378,589人の力で完成した眠れる緑の長堤20里、それでも自然は征服されぬ」と見出しを掲げ徳島県民の悲願達成の喜び、今後の洪水に対する一抹の不安が如実に示されています。現在、私たちの生活と共にある吉野川の姿はこの時に整えられたものですが、放水路工事完成後、「別宮川」の名称は、昭和7年に河川法上の認定名称が「吉野川」となり次第に人々の記憶から忘れ去られることになりました。現在、徳島市東部、鳴門市、松茂町、北島町及び藍住町などは、吉野川の大洪水から切り離され、一定規模の洪水に対して、安全・安心を享受し、大いに発展していますが、これは、先人たちの犠牲や努力のうえに成り立っていることを忘れてはならないと思います。このコーナーのペンネームを「別宮川三郎」としているのもこのためです。

3. 私たちの住む場所の昔の状況を確認しよう。

最後に、珍しい図を紹介します。馴染みがないと思いますが、平成7年(1995)に国土交通省徳島河川国道事務所（当時は建設省徳島工事事務所）が作成した「吉野川流域水害地形分類図」というもので、この図は簡単にいうと過去から現在までの吉野川の河道をまとめたものです。「沖積平野」とは河川や海の作用によって運搬された砂れきが堆積してできた平野の一種です。つまり、その地形は洪水の繰り返しによって形成されたものです。この沖積平野の微地形あるいは表層地質を分類すれば、昔の河道が浮かび上がってきます。この図を見ても徳島平野一面はまるで海の様です。徳島河川国道事務所のホームページ（※）に掲載していますので、確認してみてもいいでしょうか。

（※）防災情報 吉野川流域水害地形分類図アドレス

http://www.skr.mlit.go.jp/tokushima/bousai/suigaitikei/top_index.html

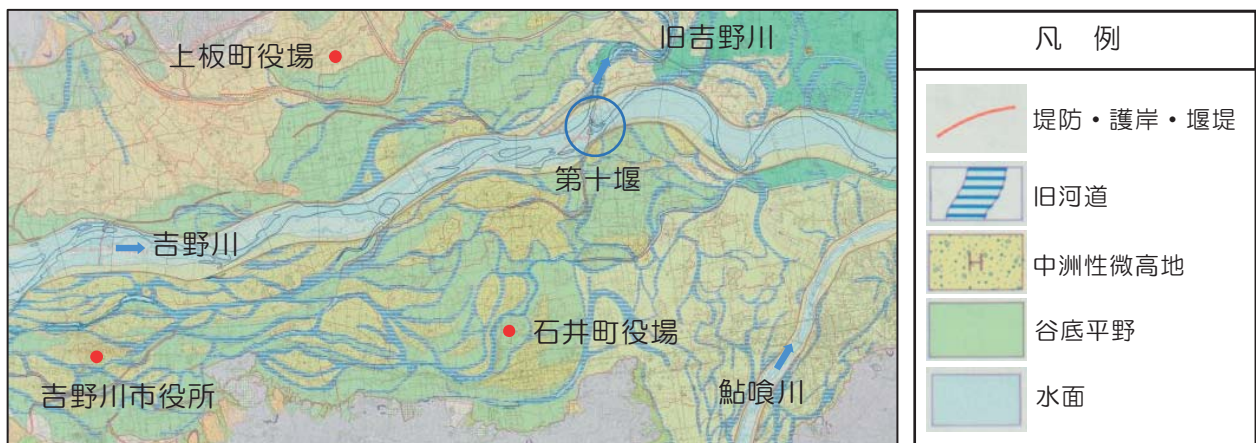


図5 吉野川流域水害地形分類図（一部抜粋）

次号では、阿波徳島藩が行った「吉野川」と「別宮川」の「新川掘り抜き工事」について探訪します。この工事により吉野川の流れが決定づけられ、下流の水利用のために第十堰が設置されることとなります。

数字で見る阿波の藍

かつて、大きな洪水は人々の害となりましたが、一方で「流水客土」と言われる藍作に適した肥沃な土壌の恵みを与えてきました。吉野川の歴史と密接に関わる「藍」。

「Our よしのがわ 2016.7 Vol.2」では、新連載であるお散歩紀行や吉野川歴史探訪で「阿波藍」を取り上げています。「阿波藍」について数字で見てください。

藍の作付面積？

藍の作付面積の記録は、1600年代半ばから残っています。記録上の最大は明治36年の15,000町歩です。15,000町歩は、約150km²であり、この面積は、板野郡（松茂町、北島町、藍住町、板野町、上板町）、名西郡石井町の面積の合計139km²よりも広く、小豆島とほぼ同じ面積です。

また、表1に明治25年の藍作面積と収穫高を示していますが、これによれば、阿波藍は全国作付面積の**65%**を占めていました。

表1 主要^{たであい}藍作付面積表（明治25年）

	徳島	三重	岡山	広島	北海道	合計
作付面積（町）	11,421	2,029	2,227	1,153	257	17,477
収穫高（×）	2,846,089	661,809	678,041	515,092	85,017	4,786,122
比率（%）	65.4	11.0	12.8	8.6	1.5	100

（「阿波藍譜 栽培製造篇」87頁より）

藍の値段はいくら？

表2のとおり品質と価格に関する記録も残されており、明治28年2月の東京商工会の商品報告によると、徳島藍玉の相場は地藍玉の**約3倍**の高値でした。

表2 東京商工会 商品報告（明治28年2月）

種類	等級	月平均相場（円）
徳島藍玉（1駄二付）	上等	90.00
	中等	47.50
	下等	25.00
地藍玉（"）	中等	13.00
	下等	9.00

3倍

（「臨谷館史聚第三集」10頁より）

このように、阿波藍は、徳島平野の至るところで栽培が行われ、全国市場を独占し良質で阿波徳島藩が全国に誇る自慢の商品だったことが伺えます。

